# 絵本太功記（えほんたいこうき）

〔**解　説**〕寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔**あらすじ**〕主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。光秀の母さつきは、主君を討った光秀を許さず、一人尼ヶ崎に転居するのですが、そこへ光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつした久吉が一夜の宿を乞うのでした。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。すると最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。十次郎は敗戦の様子を伝えて息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

# 尼ヶ崎の段

月漏る片庇、こゝに苅り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現はれ出でたる武智光秀。

「必定、久吉この家に忍びゐるこそ究竟一。たゞ一討ち」

と気は張り弓、心は矢竹薮垣の、見越しの竹をひっそぎ鑓、小田の蛙の鳴く音をばとゞめて『敵に悟られじ』と、差し足抜き足窺ひ寄る。聞こゆる物音『心得たり』と、突込む手練の鑓先に、『わつ』と玉ぎる女の泣き声、『合点行かず』と引出す手負ひ、真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒、

「ヤ、ヤヽヽヽこは母人か、しなしたり。残念至極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然たるばかりなり。声聞きつけて駆け出る操、初菊もろとも走り出で、

「ノウ母様か情けない。このあり様は何事」

と縋り嘆けば、目を見開き、

「嘆くまい、嘆くまい。内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類。かく成り果つるは理の当然。系図正しきわが家を、逆賊非道の名に穢す、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて高名顔、たとへ将軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の通さへ立たば、もつさう飯の切り米も、百万石に優るぞや。おのれが心たゞ一つで、験しは目前これを見よ。武士の命を断つ、刃も多いこの様な、引つそぎ竹の猪突き鑓。主を殺した天罰の、報ひは親にもこのとほり」

と、鐺の穂先に手をかけて、ゑぐり苦しむ気丈の手負ひ、妻は涙にむせ返り、

「コレ見たまへ光秀殿、軍の門出にくれぐも、お諌め申したその時に、思ひ止つて給はらば、かうした嘆きはあるまいに、知らぬ事とは言ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞいなう。せめて母御の御最期に、『善心に立帰る』と、たつた一言聞かしてたべ。拝むわいの」

と手を合はし、諌めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鑑曇りなき、涙に誠あらはせり。光秀は声あらゝげ、

「ヤア猪口才な諌言立て、無益の舌の根動かすな。遺恨重ぬる尾田春長。もちろん三代相恩の主君でなく、わが諌めを用ひずして、神社仏閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下のため、討取つたるはわが器量。武王は殷の紂王を討ち、北条義時は帝を流し奉る。和漢ともに、無道の君を弑するは、民を休むる英傑の志。女童の知る事ならず。退さりをらう」

と光秀が、一心変ぜぬ勇気の眼色、取りつく島もなかりけり。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。